



VOL.17 NO.1 The University of the Ryukyus Library Bulletin 1984. 3.26

新入学生諸君，蜂の如くなれ！

附属図書館長 瀬名波栄喜

新入学生諸君，入学おめでとう！ 「われわれは少数の選ばれたる者，他の者は皆地獄へ落ち，天国には彼らの住む余地はなし，われわれはこれ以上天国を狭いものにするにはできぬ」と歌ったのはオックスフォード大学の一詩人である。いわゆるエリート教育のみが真の教育であると信じている詩人・教授の声である。諸君がエリートであるか否かは諸君自身の判断にまかせるとして，とにかく諸君は多数の受験生の中から入学試験という難関を突破して本学に入学を許可されたのであるから「選ばれたる者」であることに違いはない。高校時代或いは浪人時代の試験地獄を脱して大学という自由な学園に一步足を踏み入れることのできた諸君に祝意を表するのはそのためである。さらに嬉しいことは，フレッシュマンと呼ばれ，学問的には「うぶ」ながらも，無限の可能性を秘めた諸君を，大学教育と研究のメッカたる図書館に迎えることができたということである。図書館の玄関は諸君のために常時開いており，職員一同諸君の来館を心から歓迎したい。

目 次

新入学生諸君，蜂の如くなれ…瀬名波栄喜… 1	<お知らせ> 新入生の図書館案内…………… 24
アメリカ文学と沖縄……………山里勝己… 3	投書箱より 11月～1月分…………… 25
教育学部美術工芸科教官の作品を図書館 に寄託するにあたって……………安次富長昭… 5	図書館事情…………… 26
沖縄資料展を開いて……………伊佐 眞一…10	本学教官著書寄贈コーナー…………… 28
アセアン五ヶ国資料目録(2)…………… 21	

諸君はもはや高等学校の「生徒」ではなく、学問の習得を本分とする大学の「学生」である。従って、諸君の学生生活にとって必要欠くべからざるものとは言えばそれは図書館である。それだけに本学の図書館は他大学の図書館に比較して決して遜色はない。先ず、それは大学社会の「心臓部」を象徴しているかの如く、広大なキャンパスのちょうど中心地に建ち、その偉容を誇っている。その美しいモダンなビルディングを見て誰がそれに引き付けられずにおれようか。玄関正面の湯川秀樹による「学而不厭」の文字は、諸君を一層誘い込んでしまうであろう。諸君は、今後4年間の学生生活を通して、授業時間を除いて余暇の大半をそこで過ごすことになる。

図書館に入れば、約410,000冊の和洋図書の排列された書架を始め、閲覧室、参考図書室、雑誌室、指定図書室、セミナー室、ラボ室、視聴覚室、マイクロフィルム・リーダー室、ブラウジング・ルーム等の施設が完備され、壁には本学教官の美術・工芸品が飾られ読者の疲れた目を楽しませ、かつ癒してくれる。そして、図書の貸出・返却はすべて電算化の実現に伴ない、氏名や書名を書く必要もなく、カードレス・ライブラリーとなっている。さらに、開架の74,000冊の図書については電算機による検索が可能のようにすでにその入力を完了している。この近代化された図書館こそ学問の道を選んだ諸君にとってはまさにパラダイスである。ぜひ諸君の学問研究の根城にしてもらいたい。

さて、私は新入学生諸君に対して「蜂の如くなれ！」と声を大にして叫びたい。それは万巻の書を備えた図書館においてのみ実現可能である。ある人は「鳩の如くなれ！」と言っている。また、「蛇の如くなれ！」と語った人もいる。それはそれなりの深い意味と異った解釈であろう。私があえて「蜂の如くなれ！」と言っているのは、倦怠と安逸をむさぼる存在であってはならないということである。もしそのような学生がおれば、それは飛ばない鳥か、泳がない魚同然である。蜂の如く高くまた遠く、時間・空間を超越して自由に飛翔できる想像力豊かな人間になるべくつとめねばなるまい。それこそ大学教育を受ける者の特権ともいべきいわゆる liberal education である。そして、花粉と花のミツを求めて花から花へ飛び回る蜂のように、諸君は古今東西の図書の所蔵されている図書館において、本から本へと旅を続け、無限に広がる学問の世界をかけまわらねばなるまい。

「本の虫」になれと言っているのではなく、蜂のように勤勉でかつ活動的で生産的であれと言っているのである。単なる「本の虫」は万巻の書を喰いつくしても、決してそれだけ知恵がつくものではない。蜂は不断の勤勉と努力により、ミツとワックス、すなわち sweetness と light を創造・生産するのである。新入学生諸君も、図書館に所蔵された図書を大いに活用し、学問の sweetness を味わい、真理を照らす light を探求してもらいたいと希望するものである。そうすることによってのみ、諸君も大学社会の一員として、人類が幾千年にもわたって積み重ねてきた知識の宝庫に何物かを貢献することができるのである。

Wisdom is knowing what to do next, skill is knowing how to do it, and virtue is doing it. —David S. Jordan—

(せなは えいき：教育学部教授・英文学)

アメリカ文学と沖縄

山里勝己

長期研修で外国生活をしていると、思わぬ場所でオキナワに出会う。カリフォルニア州サクラメントの日本食堂で、あたりかまわぬ大声のウチナー方言でゆんたくを続ける中年女性たちであったり、高校を終えるまでオキナワで過したカリフォルニア大学の生物専攻の女子学生であったり、あるいは1945年以前の戦闘機のパイロットであったが故にオキナワをつよく意識せざるを得なかったイギリス文学の老教授であったりする。

しかし、文学を研究する者にとって、やはりなによりも嬉しくなるのは、作品のなかにオキナワが言及されるときだ。灰色の世界に輝く一条の光が射してくる瞬間、といえば大袈裟になるが、そういうときには、作品分析などという退屈きわまることはほったらかしにしたまま、わずか数行に登場するオキナワに心を奪われ、やりかけの仕事は忘れ去られるということになる。

たとえば、メルヴィルの『白鯨』のなかの次の一節がある。「すべて瞑想を愛する波斯^{ペルシヤ}秘教の徒なる漂泊者にとって、この静かなる太平洋を一度見た後は、生涯これぞわが海と慈むであろう。それは世界の水の只中を流れ、印度洋と大西洋とはその両腕にすぎぬ。同じ波濤は人類の最も新しい民族が昨日入植したばかりのキャリフォルニアの新開の町の防波堤を洗ふかと思えば、アブラハムよりも古いアジアの國々の衰へたりとはいへ豪華なる岸邊にも打ち寄せる。しかもそのあひだには幾條の銀河のごとき珊瑚礁、限りもなく低く横たはる [いまだ知られざる] 無数の群島、未知の扉に閉ざされた幾多の日本が漂ってゐる」(田中西二郎訳)。

これは、第百十一章の一節であるが、沖縄を遠く離れて思い込みの激しい私の眼は、「幾條の銀河のごとき珊瑚礁、限りなく低く横たはる [いまだ知られざる] 無数の群島」に釘づけにな^る。このなかにわが沖縄の島影は見えないか。無数に星が煌めきながら降ってくるあの群島 (the Starry Archipelago) が執筆中のメルヴィルの意識のなかに微かに見え隠れしてはいまいか、などと余計なことに興味が湧くと、ついにはピークオド號航海図まで見詰める破目になる。見れば、ピークオド號はバシー海峽を抜け、太平洋の中央部に進んでいく。黒く太いピークオドの航跡を見ながら、すくなくとも与那国か石垣の遙か南の海上をかすめているのであるから「完全に間違っただけではない」とうそぶきながら私は自分をなぐさめてみたりする。大陸の宇宙のなかで自分の位置をさがしあぐねて困惑ばかりが続くと、水平線と空の線で形がくっきりと見える青い島宇宙の居心地の良さをなつかしむのであるが、こういうときに、前述の『白鯨』のような一節に出会えると、思い込みだけが増幅していく。

『白鯨』から約百年後の1950年代のアメリカ文学には、いわゆる「ビート派」が登場してくる。アレン・ギンズバーグ、ジャック・ケルワック、そしてゲーリー・スナイダーが「ビート派」を代表する作家・詩人たちだ。

ケルワックの『路上』(*On the Road*) に次の一節がある。語り手のサル・パラダイスは北アメリカを放浪しているのであるが、北アメリカ大陸の西の果てのサン・フランシス

コで臨時の警備員になる。そのときの描写である。「それからもう一つ丘を登ると、そこに営舎があった。この営舎は海外派遣の建設労働者たちのための一時滞在宿舎になっていた。労働者たちはここに泊って、乗船を待つのだ。その大部分の者は沖縄行きであった。たいていの者が何かからの、大体は法律からの逃亡者たちであった。アラバマから来た荒っぽい連中や、ニューヨークからきたうさんくさい連中や、全国からやってきたあらゆる種類の連中がいた。これらの連中は、まる一年間、沖縄で働くことが、どんなにおそろしいことであるか十分に承知しているので、酒を飲んで酔っていた」（福田実訳）。

ケルワックは、事実を丹念に書きとめておき、後で創作の材料に使っていく作家であった。代表作の『路上』や『達磨行者たち』は実在の人物を主人公のモデルにした作品である。（とくに後者はゲーリー・スナイダーが主人公のモデルになっていることは周知のことだ）。先に引用した一節は、ビート派的想像力による仮構があるにせよ、おそらくケルワックが実際に見たことを下敷にしているのであろう。

1945年以降に沖縄に来たアメリカ人たちは、この島を the Rock と呼んだ。これは、アメリカ国内では、1963年まで連邦刑務所のあったサン・フランシスコ湾に浮ぶアルカトラズ島をさす。アル・カポネが投獄されていた刑務所としても知られている島だ。ケルワックの荒くれたちと the Rock という蔑称は、戦後沖縄の一断面を鮮やかに示しているようだ。アメリカの青年たち（や若い兵士たち）は、太平洋の果てるところに浮ぶ the Rock で働くことが「どんなにおそろしいことであるか十分に承知して」いたのである。酔って騒ぎ続けるケルワックの荒くれたちのひとりはずいには警察に連行されるのであるが、後に残った連中は、「おふくろが何というだろうか？」と呟く心優しい連中でもあるのだ。

ゲーリー・スナイダーは1950年代にはすでに那覇を見ている。タンカーの船員として那覇に寄港したさいに那覇の町で買物をしているのだ。当時は旅人にすぎないスナイダーは、しかし、1960年代後半には沖縄の女性と結婚することになる。いわゆる「ウチナムーク」になるのである。

スナイダーの作品を紹介するスペースをすでに失くしてしまったが、去年出版された彼の最新詩集には沖縄のことを書いた詩が二篇収録されている。また、1981年の夏に沖縄を訪ねたスナイダーが、現在オモロの英訳に取り組んでいることは、「アメリカ文学と沖縄を考えていく上ではたいへん興味深いことだ。寒山や宮沢賢治を英訳し高い評価を得たスナイダーに、沖縄のオモロがどのようなインパクトを与えていくか、考えるだけでも楽しくなる。

1975年にピューリッツアー賞を受賞し、アメリカ現代詩の指導者と目されるスナイダーのなかのオキナワを、アメリカの若い詩人や研究者たちが語る日がいつか来るのではないかと思うのは、ふたたび私だけの勝手な思い込みなのであるかも知れないが、1960年代から70年代にかけてオキナワ・ヴェトナムの修羅場を体験した若い書き手たちの台頭も見られる今日、オキナワは、アメリカ文学の重厚な部分に、1940年代以降の歴史と深く関り合いながらゆっくりと登場しはじめていえるのであろう。

（やまざと かつのり：教養部助教授・アメリカ文学）

教育学部美術工芸科教官の作品を図書館に 寄託するにあたって

美術工芸科主任

安次富 長昭

図書館は、大学の学術の中心になるべき施設と常に思っている。

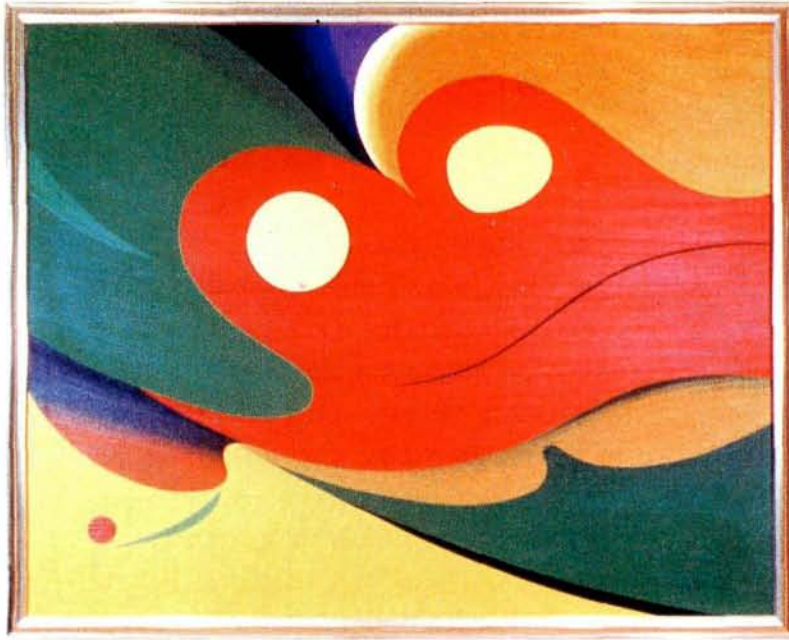
ところで、学術とは何か。辞書には、学問と芸術とあるが、戦後の日本の学校教育は科学 (Science) を偏重し、一方の芸術 (Art) をどこかにおき忘れてきたような気がする。そのために、人間形成がいびつになり、いろいろな社会問題が起きてきた。近年、やっとそれに気づいて、「ゆとりある教育」などと言われるようになり、これまでの学校教育の反省や改革が行なわれようとしている。しかし、学校現場ではゆとりのために設けられた時間をどう扱ってよいのか迷っているのが実状である。

本来、科学と芸術は厳密に分けられるものではなく、科学をつきつめていけば美につながるし、芸術のなかにも科学性は存在するのである。日本の学校教育の歪みは、科学と芸術をあまりにも分化しすぎて考えてきたところに根本的な問題がひそんでいるような気がする。学校 (School) のもとの意味はゆとり(暇)であったろうし、学校で修める学術そのもののなかにゆとりがなければならぬことは理の当然だと私は考えている。

図書館が、こうした意味の大学の学術の中心になることを希い、その学術資料として、また、「アテナイの学堂」のような学術交流の場としての環境づくりのため、一助にもなればと思い作品を寄託するものである。

(あしとみ ちょうしょう：教育学部教授・構成)

作品について



絵画「狂言」

〈F100号 リキテックス〉

安次富 長昭

昭和53年 第35回冲展出品

同年 第57回国展出品

昭和54年 沖縄タイムス芸

術選賞選抜展出品

品 芸術選賞大

賞受賞

安次富 長昭

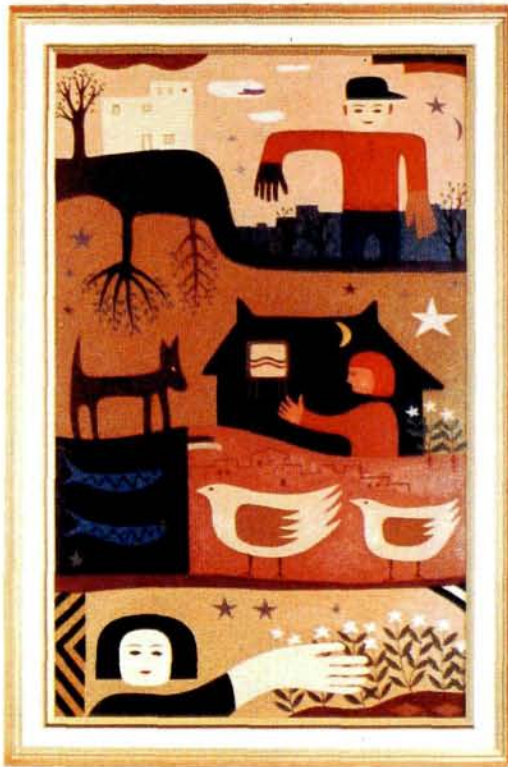
今日、私は絵というものを何ものにも拘束されない自己の^{せい}生の表出と考えている。

しかし、自己の生を観ることほどむずかしいものはない。とくに、生活が安定してくると、それに安住して自己の生を失っていく危険性が常にあるように思われる。だから、生活が安定すればするほど、もうひとつの自己を対極におきながら、自らをつっぱねる（観照する）目を強めねばならない。そして、絵はその手段として続ける必要があると思っている。

もし、真の生を自己のおかれた環境で観ることができるのであれば、絵はおのずから自己を育む自然や風土も表出し、普遍化されるものと思っている。しかし、それは美術するものの願望であって、現実の作品は常に新たな問題を提示し、しかもその解決を教えるはくれない。したがって、作品は完結ではなく、過程であるが、やはりその過程のなかにこそ見いだそうと欲している自己の生の姿や普遍性も潜在するのだから、美術は常に作品を凝視していくことが大切である。

さて、この作品「狂言」は、そのフォルムのなかに何んとなく自己の内面性にある滑稽さを観たものだから、子供の頃、よく母につれられて見に行った、沖縄芝居の「狂言」^{ちようぎん}役を思い出し名付けたものである。それほど深い意味はない。

（教育学部美術工芸科教授）



「夕暮どき」

〈油絵 50M〉

稲嶺成祚

キャンパス面に平行に、つまりすべての形を平面的に描くこと、全体的に均質な画面にすること、この二つが原則になっています。均質にするために、いくつかの場面が重なるように描きました。木が逆さになったのも、均質化の要求と、常識をはずした面白さがでればと思ってのことです。全体を暖色でまとめ、上の空のイメージから、タイトルは最後につけました。ユーモアと和やかさのある雰囲気も表現できればと願ったのですが、どうでしょうか。

(いなみね せいそ)

教育学部教授・美術科教育)



「タピストリー」

大城志津子

このタピストリーに用いられた技法は、沖縄に古くから伝わる紋織の系統で、従来は「ミンサー」と呼ばれる細帯の類に用いられたものです。

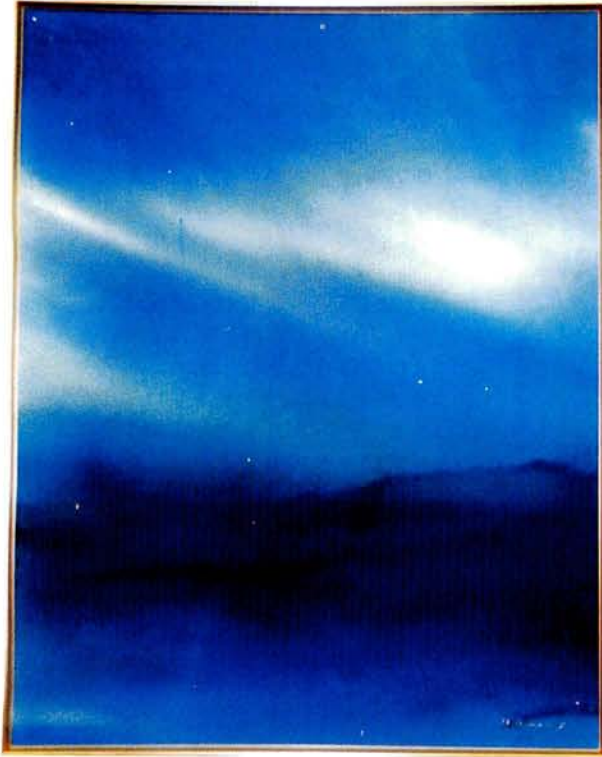
紋織の技法は14・5世紀、琉球が盛んに南方との交易をした頃、伝わってきたのではないかと考えられています。表現は違うけれども、東南アジアや南米にも、この系統の紋織がみられます。

沖縄というイメージをこのタピストリーの中に表現するために、赤と紺の染色をし、技法的には、古くから伝わる紺と紋織を応用して、いろいろな段階を試みてみました。

どうか新しい表現ができたのではないかと思われたのがこの一点です。

(おおしろ しずこ)

教育学部教授・織染)

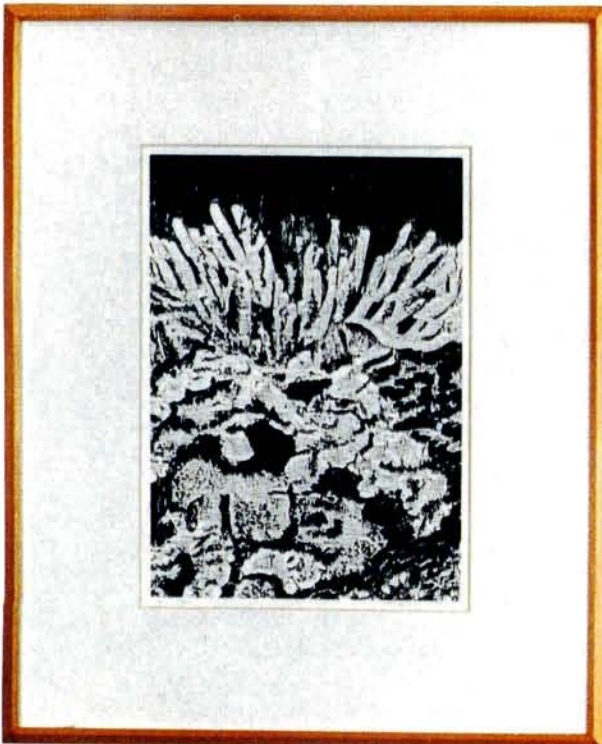


「景象・光る風」

翁長自修

ここ数年、刻々変化する自然のダイナミズムや人気のない海や山など、原初の自然を感じさせる風景をモチーフにして制作を続けている。

私の絵は、風景をそれらしい角度からそれらしく画面にとらえるという普通のやり方をあまりしない。俯瞰・仰角・極端なクローズアップの視点でとらえた構図のものが多い。(おなが じしゅう：教育学部助教授・構成)



「海の詩」(版画)

神山泰治

紺碧の空を吸い込んだエメラルドグリーンの海。

孤を描く白い砂浜。

珊瑚礁をめぐって乱舞する熱帯魚の群。

このような沖縄の海の表情を見るとき、その感動を版表現する上で、形態と色調の制約が常に悩みの種となる。

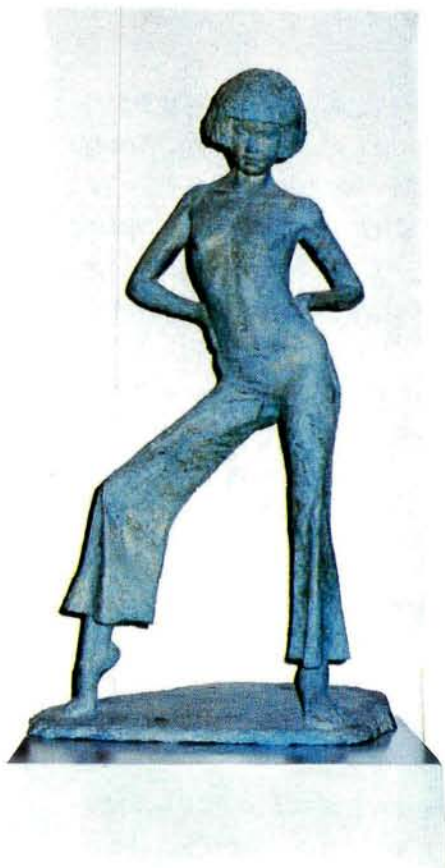
以前に闘鶏をモチーフに油彩で描き続けた。この頃のテーマの追求は、網膜に映る躍動感をキャンバスに移入し、いかに決定づけるかであった。その後木版の手法と出会い、筆致による表現が刀のタッチに変わった。彫刻刀によって版木に切り刻んでいく過程が闘鶏の羽毛をリズムカルに、あるいはダイナミックに表現することを可能にした。そして木版画の闘鶏シリーズが数年続いた。

研修の機会を得、約一年間沖縄を離れて生活した。スモッグにおおわれた東京の空の下での生活は、沖縄への憧憬を深めさせ、いつしか「海」をモチーフにした版画を手がけるようになっていた。

沖縄の民は昔から豊穡をもたらすニライカナイに憧れ、海にロマンを求めて海外に雄飛していった。

海は私の心をとらえて離さない。

(かみやま たいじ：教育学部助教授・絵画)



「パンタロンの少女」

〈高さ 130cm〉

西村貞雄

14・5歳の少女をモチーフにした。おしゃれの好きな少女がパンタロンをはいていた初々しくしなやかな姿態とちょっとすました表情が醸し出すひととき……

旋回することにより空間を拡げていく律動感のようなものをねらいとした。

(にしむら さだお)

教育学部助教授・彫塑)

「Genetics 83—3.」

(板に白亜地, 卵テンペラ)
45.0×60.0cm 1983年作)

永津 禎三

Genetics のシリーズは1980年頃から現在まで続いている。このシリーズの前までの仕事は、かなり具象的であったが、描いている物に対する自分自身の実感が今一つなかった。その反省から、自然物を自分の目でもう一度見直し、そのエッセンスを抽出するという仕事に変わっていったのだと思う。このシリーズでは生命的(有機的)な形態の反復や、それに対立する無機的な形態が、どちらかが強くなったり弱くなったりして続いている。

この作品は、そのシリーズの中の、沖縄に来てから一年程経って描いたものである、形態の中に沖縄の自然からの感応が入り込んでくる第1歩の作品となるよう仕事を続けていきたい。

(ながつ ていぞう)

教育学部助手・絵画)



沖縄資料展を開いて

琉球大学図書館は、これまで「沖縄学」の発展に寄与すべく、あらゆる分野の史資料、論文等の沖縄関係資料を精力的に収集してきた。そのなかには、明治26年創刊の『琉球新報』をはじめとして、近代史研究に必要な不可欠な様々の新聞が含まれている。それらの大まかな内訳を見てもわかるように、政論、経済策、および文化的意見を広く住民に開陳する、主要なオピニオン紙だけでも相当の数にのぼっており、まして、各分野の専門紙、政党の機関紙、学生新聞といった特殊なサークル紙的性格のものまでも加えると、いっそうその正確な数字を把握することはむづかしい。

と言うのは、同じ新聞が何度かの題号改題を行っていたり、発行後わずかの期間にして廃刊、あるいは自然休刊というように消滅したものが数多くあること、そのうえ、資料の保存という点からみると沖縄戦の与えた甚大な影響が存在している。そのことが、現在までに未収集の分量を大きく残している事実となっているのだが、その意味からも、大学職員、学生はむろんのこと、学外者に対しても新聞資料への関心を高めていただくと同時に、ひいては情報提供の期待をこめて、小規模ながら「琉球弧の新聞展」を開催した。期間は、1984年1月18日(水)から31日(火)までの12日間、図書館2階ロビーのガラスケースを利用して行なった。展示にあたっては、出来る限り多種類の新聞を観覧に供する意図から、タイトルページ一面のみを複写陳列した。これでもって、わずかなりともその時代のいぶきを感じられたのであれば、展示者としてこれにすぎる喜びはない。

ついでには、これを機会に琉球大学図書館で所蔵している主な新聞の詳しい目録を添付することにした。この小目録を使うことで、欠号がすぐにわかり、今後の収集活動に多少なりとも役立つことを希望する。(ここで言う所蔵には、現物の新聞ばかりでなく、紙焼き複写物やマイクロフィルムをも含める。)

なお、戦後の『琉球新報』、*『沖縄タイムス』、『Morning Star』、『沖縄時報』、*『宮古毎日新聞』、『南沖縄新聞』、『八重山毎日新聞』は、紙幅の都合により割愛した。しかし、いくらかでも所蔵しているものに関しては、参考文献とあわせて末尾にその紙名を列記しておきたい。

最後に、長年収集に協力して戴いた多くの方々、及び各資料館に対しお礼を述べるとともに、『うるま新報』(189枚)、『沖縄タイムス』(134枚)、『琉球日報』(1枚)、『沖縄毎日新聞』(1枚)を寄贈して下さった元佐敷村助役、現在同町文化財専門委員の平良亀順氏へも、記して深い感謝の意をささげたいと思う。

<*印は、「琉球弧の新聞展」に出品したもので、()内数字は号数を示す。>

I. 沖縄本島

* 琉球新報

1898(明治31)⁴/₁(792)→⁵/₉(810), ⁵/₁₁(812)→¹²/₂₉(926), 1899(明治32)¹/₅(928)→⁶/₃(1179)→1901(明治34)³/₁(1312), ⁴/₁(1327)→1902(明治35)⁸/₂₁(1576), ⁹/₁(1581)→1903(明治36)⁹/₂₇(1773), ¹⁰/₁(1775)→¹¹/₁₇(1798), ¹¹/₂₁(1800)→¹¹/₂₅(1802), ¹²/₁(1805)→1904(明治37)¹/₁₇(1828), ¹/₂₁(1830)→²/₃(1836), ²/₇(1838)→⁴/₁₉(1874), ⁴/₂₃(1876)→⁴/₂₅(1877), ⁴/₂₉(1879)→⁵/₁₇(1888), ⁵/₂₁(1890)→⁵/₂₃(1891), ⁵/₂₇(1893)→⁸/₅(1927), ⁸/₉(1929)→1905(明治38)¹/₂₃(2011), ¹/₂₇(2013)→¹/₂₉(2014), ²/₃(2016)→1906(明治39)²/₁₅(2201), ²/₂₁(2204)→³/₁(2208), ³/₅(2210)→³/₁₁(2213), ³/₁₅(2215)→³/₂₅(2220), ⁴/₁(2223)→⁴/₇(2227), ⁴/₁₀(2229)→⁴/₂₂(2240), ⁴/₂₅(2242), ⁴/₂₇(2244)→⁷/₂₈(2323), ⁷/₃₁(2325)→⁹/₁₅(2365), ⁹/₁₈(2367)→⁹/₂₃(2372), ⁹/₂₆(2374)→¹¹/₂₇(2424), ¹¹/₃₀(2427)→¹²/₉(2435), ¹²/₁₂(2437)→1907(明治40)⁷/₃₀(2626), ⁸/₁(2628)→1908(明治41)¹/₁(2764), ¹/₅(2766)→⁵/₁(2879), ⁵/₃(2881)→⁵/₇(2885), ⁵/₉(2887)→⁶/₂₈(2937), ⁷/₁(2940)→⁷/₆(2945), ⁷/₈(2947)→⁸/₁(2971), ⁸/₃(2973)→¹²/₂₇(3115), ¹²/₂₉(3117)→1909(明治42)¹/₂₃(3140), ¹/₂₆(3143)→¹¹/₂₆(3439), ¹¹/₂₉(3442)→1912(明治45)²/₂₇(4238), ²/₂₉(4240)→1914(大正3)⁴/₂₄(5001), ⁴/₂₆(5003)→1915(大正4)¹²/₂₂(5589), ¹²/₂₄(5591)→1916(大正5)¹/₂₀(5615), ¹/₂₂(5617)→³/₁₇(5671), ³/₁₉(5673)→⁸/₂₁(5825), ⁸/₂₃(5827)→1917(大正6)⁴/₂₆(6062), ⁴/₂₈(6064)→¹⁰/₂₆(6241), ¹⁰/₂₈(6243)→1918(大正7)⁵/₃₁(6450), 1924(大正13)⁵/₂₁(8446), ⁷/₁₁(8497), ⁷/₁₅(8501), ⁷/₁₈(8504), ⁷/₂₀(8506), ⁷/₂₂(8508), ⁷/₂₈(8514), 1935(昭和10)⁵/₁₁(12273), 1938(昭和13)¹¹/₂₇(13521), ¹¹/₂₆(13520), 1939(昭和14)⁵/₂(13669)→⁵/₃(13670), ⁵/₅(13672)→⁵/₁₃(13680), ⁵/₂₅(13691)→⁵/₂₈(13694), ⁵/₃₁(13697)→⁶/₁₈(13715), ⁷/₂(13729), ⁷/₈(13735)→⁹/₂₈(13816), ¹⁰/₁(13819)→¹⁰/₁₉(13836), ¹⁰/₂₂(13838)→¹¹/₁₅(13861), ¹¹/₁₈(13864)→¹¹/₂₆(13871), ¹²/₇(13882)→¹²/₁₈(13893), 1940(昭和15)¹/₁(13906), ¹/₇(13909)→¹/₁₁(13913), ¹/₁₅(13917)→¹/₁₇(13919), ¹/₁₉(13921)→¹/₂₀(13922), ¹/₂₂(13924)→¹/₂₃(13925), ¹/₂₅(13927)→¹/₂₇(13929), ¹/₃₀(13932)→²/₉(13942), ³/₃(不明), ⁹/₁₆(不明)

沖縄新聞

1907(明治40)¹²/₂₁(397)→¹²/₂₂(398)

* 沖縄毎日新聞

1909(明治42)²/₂₈(73)→⁴/₉(111), ⁴/₁₁(113)→⁹/₁₀(264), ⁹/₁₂(266)→⁹/₁₅(269), ⁹/₁₈(272)→¹²/₁₈(358), ¹²/₂₀(360)→¹²/₂₉(369), ¹²/₃₁(371)→1910(明治43)²/₂₁(419), ²/₂₃(421)→⁴/₁₀(465), ⁴/₁₂(467)→⁶/₄(519), ⁶/₆(521)→⁶/₁₇(532), ⁶/₁₉(534)→⁸/₂₄(600), ⁸/₂₆(602)→¹⁰/₁₄(648), ¹⁰/₁₆(650)→¹⁰/₃₁(664), ¹¹/₂(666)→1911(明治44)¹¹/₂₃(1038), ¹¹/₂₅(1040)→¹²/₂₉(1073), ¹²/₃₁(1075)→1912(明治45)¹/₁₃(1086), ¹/₁₅(1088)→⁶/₇(1228), ⁶/₉(1230)→⁷/₁₇(1268), ⁷/₁₉(1270)→1912(大正元)¹¹/₂₉(1398), ¹²/₁(1400)→1914(大正3)⁷/₁₆(1973), ⁹/₁₁(2028)→⁹/₁₄(2031), ⁹/₁₆(2033)→¹¹/₁₇(2092), ¹¹/₁₉(2094)→¹²/₃₁(2135)

沖繩毎日新報 (改題年月日不明)

↓
沖繩毎日新聞 (1919 <大正8> 月日不明・改題)

沖繩民報

1915(大正4)^{6/20}(332), ^{6/22}(334)→^{6/23}(335)

* 沖繩朝日新聞

1924(大正13)^{6/28}(2932), ^{7/7}(2941)→^{7/8}(2942), ^{7/13}(2947)→^{7/14}(2948), ^{7/18}(2952)
→^{7/19}(2953), ^{7/25}(2959)→^{7/26}(2960), ^{7/28}(2962), ^{7/30}(2964), 1930(昭和5)^{3/8}(4922),
^{5/3}(4975)→^{5/4}(4976), ^{6/5}(5007)→^{6/6}(5008), ^{6/19}(5021), ^{7/22}(5054)→^{7/28}(5060),
^{8/2}(5065)→^{8/8}(5071), ^{10/22}(5143)→^{10/24}(5145), ^{10/26}(5147)→^{10/28}(5149), ^{10/31}(5152)
→^{11/3}(5155), ^{11/6}(5157)→^{11/18}(5169), ^{11/22}(5173)→^{11/23}(5174), ^{11/26}(5176)→^{11/28}
(5178), 1939(昭和14)^{6/24}(8780)

沖繩時事新報

↓
* 沖繩タイムス (1919 <大正9> 12月・改題)

1924(大正13)^{7/3}(1205)→^{7/10}(1212), ^{7/18}(1217)→^{7/19}(1218), ^{7/21}(1220), ^{7/27}(1226),
^{8/1}(1230), ^{8/5}(1234), ^{8/29}(1257)→^{9/3}(1261)

沖繩日日新聞

↓
* 沖繩日報 (1932 <昭和17> 1月・改題)

1936(昭和11)^{11/3}(1674), 1939(昭和14)^{5/1}(2546), ^{5/3}(2548)→^{5/13}(2558), ^{5/16}(2561)
→^{5/19}(2563), ^{5/23}(2567), ^{5/26}(2570)→^{5/28}(2572), ^{5/31}(2575)→^{6/1}(2576), ^{6/6}(2581)
→^{6/11}(2586), ^{7/1}(2606)→^{7/2}(2607), ^{7/6}(2611), ^{7/8}(2613), ^{7/10}(2615)→^{9/28}(2694),
^{11/13}(2737)→^{11/30}(2753), ^{12/2}(2755)→^{12/18}(2771), 1940(昭和15)^{1/1}(2784), ^{1/6}(2786)
→^{1/8}(2788), ^{1/13}(2793)→^{1/18}(2798), ^{1/22}(2802)→^{1/30}(2810)

琉球新報

↓
沖繩朝日新聞

}とともに統合 (1940 <昭和15> ^{12/16})

* 沖繩新報

1945(昭和20)^{2/1}(1471)→^{2/2}(1472), ^{2/19}(1489)

創刊号は無名 (1945 <昭和20> ^{7/25})

↓
ウルマ新報

1945(昭和20)^{8/15}(4), ^{9/5}(7), ^{9/26}(10), ^{10/10}(12)→^{10/17}(13), ^{10/31}(15)→^{11/21}(18),
^{12/5}(20)→1946(昭和21)^{1/16}(26), ^{1/30}(28), ^{2/13}(30)→^{5/29}(45)・* うるま新報へ改題
→^{7/4}(^{1/2}外)→^{7/5}(50), ^{7/19}(52)→1948(昭和23)^{7/6}(^{1/2}外)→^{11/5}(^{1/2}外)→^{10/29}(171),
^{11/5}(^{1/2}外), ^{11/12}(173)→1949(昭和24)^{6/13}(204), ^{6/27}(206)→^{9/27}(227), ^{10/4}(229)→
^{10/7}(230), ^{10/14}(232)→1950(昭和25)^{5/6}(394), ^{5/9}(396), ^{5/11}(398)→^{5/28}(413), ^{5/31}
(415)→^{6/24}(435), ^{6/27}(438)→日付不明(517・^{1/2}外)→^{10/21}(552), ^{10/23}(554)→^{11/2}
(564), ^{11/4}(566)→^{5/31}(768), ^{6/2}(770)→^{6/23}(790), ^{6/25}(792)→^{8/30}(856), ^{9/1}(858)
→1951(昭和26)^{9/10}(867)・琉球新報へ改題→現在

* うるま新報 (こども版)

1950(昭和25)^{1/1}(89)→^{2/3}(94), ^{2/17}(96)→^{6/23}(114), ^{7/7}(116)

* 沖縄ヘラルド

1949(昭和24)¹²/₁₂(1)→1950(昭和25)²/₈(23), ²/₁₃(25)→²/₂₇(31), ⁷/₇(33)→⁸/₉(64),
 ↓⁸/₁₂(67)→⁹/₉(94), ⁹/₁₁(96)→⁹/₁₃(98), ⁹/₁₆(101)→⁹/₂₉(111)

沖縄新聞 (1951 <昭和26> ²/₁・改題)

↓
 沖縄朝日新聞 (1951 <昭和26> ⁹/₁₇・改題)

1951(昭和26)¹⁰/₁₇(478)→¹⁰/₂₅(486), ¹⁰/₂₈(489)→¹¹/₃(495), ¹¹/₆(497)→¹¹/₁₀(501),
¹¹/₁₂(503)→¹¹/₂₃(514), ¹¹/₂₇(518), ¹¹/₃₀(521)→¹²/₄(525), ¹²/₇(528)→¹²/₁₈(539),
¹²/₂₁(542)→¹²/₂₈(548), 1952(昭和27)¹/₁(552), ¹/₂₁(569), ²/₁(580)→²/₂(581), ²/₄(583)
 →²/₁₇(596), 不明(599), ²/₂₂(601), ²/₂₈(607)→³/₃(610), ³/₆(613)→³/₁₁(618), ³/₁₉
 (626)→³/₂₉(635), ⁴/₄(640), ⁴/₈(644), ⁴/₁₂(648), ⁴/₁₈(654), ⁴/₂₁(657), ⁴/₂₄(660)
 →⁴/₂₇(663), ⁴/₂₉(665), ⁵/₆(670), ⁵/₈(672)→⁵/₁₀(674), ⁵/₁₃(677), ⁵/₁₆(680)→⁵/₂₀(684),
⁵/₂₇(690), ⁵/₂₉(692)→⁵/₂₉(693), ⁶/₃(697), ⁶/₅(699), ⁶/₇(701)→⁶/₉(703), ⁶/₁₁(705)
 →⁶/₁₄(708), ⁶/₁₆(710), ⁶/₁₈(712)→⁶/₂₂(716), ⁶/₂₄(718)→⁶/₂₅(719), ⁶/₂₈(722)→⁷/₇
 (731), ⁷/₉(733)→⁷/₃₁(755), ⁸/₁(756)→⁸/₃(758), ⁹/₂(787)→⁹/₂₅(808), ⁹/₂₇(810)→
⁹/₃₀(813), ¹⁰/₁₅(827), ¹¹/₁(844)→¹²/₁₈(891), ¹²/₃₀(893)→1953(昭和28)³/₂₇(986),
³/₂₉(988)→⁵/₂₉(1048), ⁶/₂(1052)→1954(昭和29)⁵/₁₉(1394), ⁵/₂₁(1396)→⁷/₁(1437)・
 沖縄新聞へ改題→1955(昭和30)²/₁₇(1661), ²/₁₉(1663), ²/₂₂(1666)→³/₁₂(1684), ³/₁₄
 (1686)→⁷/₉(2157), ⁷/₁₁(2159)→⁸/₁₅(2192), ⁸/₁₇(2194)→1957(昭和32)¹²/₂₆(2684),
¹²/₂₉(2687), 1958(昭和33)¹/₁(2690)→¹/₁₅(2702)

* 沖縄毎日新聞

1949(昭和24)⁶/₁₄(45), ¹²/₁(68)→¹²/₂₂(71), 1950(昭和25)¹/₁₂(74)→²/₉(78), ²/₂₁(80)
 →³/₁₄(86), ³/₁₈(88)→⁴/₁(94), ⁴/₆(96), ⁴/₁₁(98)→⁴/₁₃(99), ⁴/₁₈(101), ⁴/₂₂(103)→
⁸/₆(143), ⁸/₁₀(146)→⁸/₁₆(151), ⁸/₁₈(153)→⁸/₂₄(157), ⁹/₃(162)→⁹/₁₀(166), ⁹/₁₅(169)
 →⁹/₂₁(174), ⁹/₂₆(177)→¹⁰/₃(183), ¹⁰/₅(185)→¹⁰/₈(188), (2日分不明)

* 琉球日報

1950(昭和25)²/₁₂(1)→²/₁₃(2), ²/₁₅(4)→²/₁₆(5), ²/₂₀(7)→³/₂(16), ³/₄(18)→³/₃₀(40),
⁴/₁(42)→⁴/₁₅(54), ⁴/₁₈(56)→⁴/₂₀(58), ⁴/₂₂(60)→⁴/₂₅(62), ⁴/₂₇(64)→⁵/₁₂(77), ⁵/₁₅
 (79)→⁵/₂₄(87), ⁵/₂₆(89)→⁷/₁(120), ⁷/₄(122)→⁷/₁₁(128), ⁷/₁₃(130)→⁷/₂₉(146),
⁸/₁(149)→⁸/₉(155), ⁹/₁(176)→⁹/₂(177), ⁹/₄(179)→⁹/₁₁(186), ⁹/₁₃(188), ⁹/₁₆(191),
⁹/₁₈(193)→⁹/₃₀(205), ¹⁰/₂(207)→¹⁰/₇(212), ¹⁰/₉(214)→¹⁰/₁₀(215), ¹²/₁₉(283)→
 1951(昭和26)¹/₁(295), ¹/₅(297)→¹/₆(298), ¹/₉(301), ¹/₁₁(303)→¹/_{不明}(314), ¹/₂₄(316)
 ↓¹/₃₁(323), ²/₂(325)→²/₆(329), ²/₉(331), ²/₁₄(336)→²/₁₇(340), ²/₂₃(345)→³/₄(354)

琉球新聞 (1951 <昭和26> 月日不明・改題)

1951(昭和26)⁹/₇(528), ⁹/₉(530)→⁹/₁₀(531), ⁹/₂₁(542), ⁹/₂₃(544)→⁹/₂₉(549), ¹⁰/₁(551)
 →¹⁰/₁₃(563), ¹⁰/₁₅(565)→¹⁰/₂₀(570), ¹⁰/₂₂(572)→¹⁰/₂₄(574), ¹⁰/₂₆(576)→¹⁰/₂₉(579),
¹⁰/₃₁(581)→¹¹/₁(582), ¹¹/₃(584), ¹¹/₆(586)→¹¹/₈(588), ¹¹/₁₀(590), ¹¹/₁₂(592),
¹¹/₁₄(594), ¹¹/₁₆(596), ¹¹/₂₀(600), ¹¹/₂₇(607), ¹²/₂(612)→¹²/₇(617), ¹²/₁₀(620),
 ↓¹²/₁₃(623)→¹²/₁₄(624), ¹²/₁₆(626)→¹²/₁₇(627), ¹²/₁₉(629), ¹²/₂₁(631)→¹²/₂₄(634),

$^{12}/_{29}$ (不明), 1952(昭和27) $^1/_5$ (642), $^1/_7$ (644), $^1/_12$ (649)→ $^1/_13$ (650), $^1/_15$ (652),
 $^1/_19$ (656)→ $^1/_21$ (658), $^1/_23$ (660)→ $^1/_26$ (663), $^1/_28$ (665)→ $^2/_23$ (691), $^2/_26$ (694)→ $^2/_29$
(697), $^3/_3$ (700)→ $^3/_6$ (703), $^3/_8$ (705)→ $^3/_13$ (710), $^3/_15$ (712)→ $^3/_27$ (723), $^5/_2$ (758),
 $^5/_4$ (760)→ $^5/_10$ (766), $^5/_12$ (768)→ $^5/_20$ (776), $^5/_24$ (780), $^5/_27$ (782)→ $^5/_28$ (783), $^5/_30$ (785)
→ $^5/_31$ (786), $^6/_2$ (788)→ $^6/_9$ (795), $^6/_11$ (797)→ $^6/_16$ (802), $^6/_18$ (804)→ $^6/_21$ (807), $^6/_23$
(809), $^6/_25$ (811)→ $^7/_8$ (824), $^7/_10$ (826)→ $^8/_9$ (856), $^8/_11$ (858)→ $^9/_11$ (886), $^9/_13$ (888)
→ $^9/_16$ (891), $^9/_21$ (896)→ $^{11}/_{11}$ (945), $^{11}/_{13}$ (947)→1953(昭和28) $^1/_26$ (1018), $^1/_28$ (1020)
→1954(昭和29) $^5/_5$ (1471), $^5/_7$ (1473)→ $^5/_22$ (1487), $^5/_24$ (1489)→ $^5/_28$ (1493), $^5/_30$ (1495),
 $^6/_1$ (1497)→ $^7/_8$ (1534), $^7/_11$ (1537)→ $^7/_22$ (1548)

沖繩日報 (1954 <昭和29> 月日不明・改題)

1954(昭和29) $^8/_3$ (1560)→ $^{12}/_{24}$ (1696)

沖繩日日新聞

1959(昭和34) $^7/_2$ (2)→ $^7/_6$ (6), $^7/_8$ (8)→ $^7/_9$ (9), $^7/_12$ (12)→ $^7/_25$ (25), $^7/_31$ (31)→ $^8/_23$ (53),
 $^8/_25$ (55)→ $^9/_7$ (68), $^9/_9$ (70)→ $^9/_18$ (78), $^9/_20$ (80)→ $^9/_22$ (82), $^9/_29$ (89), $^{10}/_{10}$ (100)→
 $^{11}/_{17}$ (135), $^{11}/_{20}$ (138)→ $^{11}/_{29}$ (147), $^{12}/_1$ (149)→ $^{12}/_{14}$ (162), $^{12}/_{16}$ (164)→1960(昭和35)
 $^1/_4$ (181), $^1/_25$ (183)→ $^1/_27$ (185), $^1/_29$ (187)→ $^2/_2$ (191), $^2/_4$ (193)→ $^2/_13$ (202), $^2/_15$ (204)
→ $^7/_5$ (339), $^7/_7$ (341)→ $^7/_9$ (343), $^7/_11$ (345)→ $^9/_21$ (408), $^9/_23$ (410), $^9/_26$ (412)→ $^9/_29$
(415), $^{10}/_1$ (417)→ $^{10}/_{29}$ (444), $^{10}/_{31}$ (446)→ $^{11}/_{10}$ (456), $^{11}/_{12}$ (458)→ $^{12}/_{10}$ (485), $^{12}/_{12}$
(487)→ $^{12}/_{14}$ (488)

* 魁新聞

1960(昭和35) $^4/_8$ (106), $^5/_8$ (109)→ $^5/_18$ (110), $^6/_28$ (112), $^7/_18$ (114), $^8/_18$ (117), $^9/_18$ (119),
1961(昭和36) $^3/_18$ (133)→ $^3/_28$ (134), $^4/_18$ (136)→ $^4/_28$ (137), 1962(昭和37) $^1/_18$ (159),
 $^2/_28$ (163)→ $^3/_8$ (164), 1964(昭和39) $^3/_18$ (222)→ $^5/_8$ (226), $^6/_8$ (229), $^7/_8$ (232), $^8/_18$ (235),
1965(昭和40) $^4/_8$ (255)→ $^4/_18$ (256), $^5/_28$ (259), $^6/_18$ (261)→ $^7/_8$ (262), $^7/_12$ (臨時号),
 $^{10}/_8$ (268)→ $^{10}/_{18}$ (269), $^{11}/_{18}$ (271), $^{12}/_{28}$ (274), 1966(昭和41) $^1/_28$ (276), $^2/_18$ (278)→
 $^2/_28$ (279), $^3/_18$ (281)→ $^3/_28$ (282), $^4/_18$ (284)→ $^7/_18$ (291), $^8/_28$ (295), $^9/_18$ (297)→1967
(昭和42) $^2/_18$ (310), $^2/_28$ (312)→ $^6/_18$ (321), $^7/_18$ (323)→ $^8/_18$ (326), $^9/_8$ (328)→ $^{10}/_{28}$ (332),
 $^{12}/_8$ (335)→1968(昭和43) $^3/_18$ (343), $^4/_8$ (345)→ $^6/_18$ (351), $^8/_28$ (356), $^{11}/_{18}$ (363)→
 $^{12}/_8$ (364), $^{12}/_{28}$ (366)→1969(昭和44) $^1/_18$ (367), $^2/_8$ (369)→ $^5/_8$ (377), $^5/_28$ (379)→ $^6/_18$
(380), $^7/_18$ (383)→ $^9/_18$ (388), $^{10}/_{18}$ (391)→ $^{11}/_{18}$ (394), $^{12}/_{28}$ (397)→1970(昭和45) $^1/_8$
(398), $^1/_28$ (400), $^9/_28$ (418), $^{11}/_8$ (423)→1971(昭和46) $^1/_18$ (426), $^3/_28$ (431), $^5/_18$ (434)
→ $^{12}/_8$ (443), 1972(昭和47) $^4/_18$ (447), $^8/_18$ (451), $^{12}/_{28}$ (454)

沖繩新聞

1965(昭和40) $^{11}/_3$ (1)→1966(昭和41) $^5/_21$ (17)

旬刊新琉球

1959(昭和34) $^2/_28$ (195), 1961(昭和36) $^6/_20$ (266), 1962(昭和37) $^1/_1$ (277), 1966(昭和41)
 $^5/_18$ (297), $^{12}/_1$ (304)→1969(昭和44) $^1/_15$ (316)

沖繩政経新聞

1959(昭和34)⁶/₁₁(4)→⁶/₂₁(5), 1960(昭和35)²/₁(25)

新沖繩

1970(昭和45)⁴/₁₀(1)→⁵/₁₀(3)

人民

1962(昭和37)¹/₂₃(1)→⁷/₂₅(26), ⁸/₈(28)→¹⁰/₂₄(37), ¹¹/₅(号外), ¹¹/₁₈(39)→⁷/₁₅(号外)
 →1965(昭和40)⁴/₂₅(号外)→⁶/₄(号外)→1969(昭和44)⁵/₂₄(377), ⁶/₇(379)→⁶/₁₄(380),
⁶/₂₈(382)→⁷/₁₂(384), ⁷/₂₆(386)→¹¹/₂₂(号外)→1971(昭和46)¹²/₄(509), ¹²/₁₈(511)→
 1972(昭和47)³/₁₈(524), ⁴/₁(526)→⁴/₈(527), ⁴/₂₂(529)→⁷/₂₂(542), ⁸/₅(544)→¹²/₉
 (562), ¹²/₂₃(564)→1973(昭和48)³/₂₄(576), ⁴/₇(578)→1974(昭和49)²/₂(620)・沖繩
 民報へ改題→⁹/₂₁(653), ¹⁰/₅(655)→1975(昭和50)⁵/₂₄(687), ⁶/₇(689)→⁹/₆(702),
⁹/₂₀(704)→1978(昭和53)⁴/₈(834), ⁴/₂₂(836), ⁵/₆(838)→¹²/₂(868), ¹²/₁₆(870)→
 1980(昭和55)⁵/₁₀(941), ⁵/₂₄(943)→1981(昭和56)²/₁₄(980), ²/₂₈(982)→⁷/₄(1000),
⁷/₁₈(1002)→⁹/₅(1009), ⁹/₂₆(1012)→¹²/₁₂(1023), 1982(昭和57)¹/₂(1025)→1983(昭
 和58)²/₁₂(1080), ³/₅(1083)→⁴/₉(1088), ⁴/₂₃(1090)→1984(昭和59)¹/₂₈(1129)

社会大衆

1964(昭和39)⁹/₁₀(1)→¹⁰/₁₅(7)

民主

1966(昭和41)¹/₂₆(1)→⁷/₁(6), ¹⁰/₁₂(8)→¹²/₁(9), 1967(昭和42)²/₅(11)→¹¹/₁₅(20),
 1968(昭和43)²/₁₅(24)・自由民主(改題年月日不明), ⁹/₅(33)→⁹/₂₅(35), ¹⁰/₁₅(37),
 1969(昭和44)¹/₁₅(42), ³/₃₀(44)

琉球弘報

1955(昭和30)³/₁₅(118)

琉球大学新聞

1956(昭和31)¹²/₂₂(25)→1957(昭和32)³/₁(26), ¹²/₇(29)・琉球大学学生新聞(改題年
 月日不明)→1962(昭和37)⁴/₁₂(53), ⁶/₁₅(55)→1964(昭和39)⁷/₂₀(69), ¹²/₅(71)→1966
 (昭和41)⁴/₃₀(79), ¹⁰/₂₅(81)→1970(昭和45)¹⁰/₁₅(106), 1971(昭和46)²/₂₇(108)→¹⁰/₁
 (112), 1972(昭和47)²/₁(114)→⁴/₁₅(115), ⁷/₁(118)→¹¹/₁(122), 1973(昭和48)¹/₁(124),
⁶/₁(127)→¹²/₁(129), 1974(昭和49)⁶/₁₀(131), ¹²/₁(133)→1977(昭和52)²/₁(140)

琉大タイムズ

1959(昭和34)¹⁰/₁(1)→1965(昭和40)⁵/₂₆(33), 1966(昭和41)⁶/₁₁(35)→⁷/₂₀(36), 1967
 (昭和42)⁶/₂₆(39)→⁷/₁(40), 1968(昭和43)³/₁₀(42)→1969(昭和44)¹/₂₅(45), ⁶/₂₁(47)
 →1974(昭和49)¹²/₁(53)

琉大寮報

1964(昭和39)⁷/₇(1)→1966(昭和41)⁷/₁₈(5)

琉大ジャーナル

1974(昭和49)¹²/₁(1)→1975(昭和50)¹/₁(2), ⁶/₁₅(4)→1983(昭和58)³/₉(21)

嘉数学園時報

1960(昭和35)¹⁰/₁₄(9)→¹²/₈(10), 1961(昭和36)⁷/₃(14)→1962(昭和37)¹⁰/₅(17), 1963

- (昭和38)¹²/₂₄(19)→1966(昭和41)⁴/₁₅(24)
 月刊高校生新聞
 1966(昭和41)⁴/₁(1)→1967(昭和42)⁸/₁(5)
 琉球育英時報
 1963(昭和38)⁷/₈(1)→1966(昭和41)⁴/₁(9)
 沖縄学援会々報
 1964(昭和39)⁴/₁₀(2), 1968(昭和43)⁴/₁₀(5)
 沖縄文化協会報
 1965(昭和40)⁵/₁(1)
 沖縄芸能新聞
 1965(昭和40)¹²/₂₀(1)
 沖縄読書新聞(沖縄出版協会)
 1969(昭和44)⁸/₂₀(1)→⁹/₃₀(2)
 沖縄読書新聞(沖縄読書新聞社)
 1975(昭和50)⁴/₁(1)

II. 宮古

宮古民友新聞

- | | | |
|-------------------------|---|-----|
| みやこ時報 (1940 <昭和15> 10月) | } | と統合 |
| 宮古報知新聞 (1941 <昭和16> 2月) | | |
- ↓
 宮古朝日新聞 (1941 <昭和16> 2月・改題)
 ↓
 宮古民友新聞 (1946 <昭和21> ⁷/₁₀・改題)

1947(昭和22)⁵/₁₄(725), ⁶/₅(731), 1948(昭和23)⁴/₃, 1949(昭和24)¹/₁, ¹/₁₄, ¹/₁₇, ¹/₂₀,
¹/₂₂, ¹/₂₅, ²/₅, ²/₁₂, ²/₁₄, ²/₁₈, ²/₂₂, ²/₂₅, ²/₂₆, ³/₃, ³/₅, ³/₉, ³/₁₄, ³/₁₇, ³/₂₀, ³/₂₃,
³/₂₇, ³/₃₀, ⁴/₄, ⁴/₈, ⁴/₁₀, ⁴/₁₆, ⁴/₁₉, ⁴/₂₅, ⁴/₂₈, ⁵/₃, ⁵/₁₄, ⁵/₁₇, ⁵/₂₀, ⁵/₂₃, ¹⁰/₄(915),
¹⁰/₁₇(917)→¹⁰/₃₀(919), ¹¹/₇(921)→¹¹/₁₅(923), ¹¹/₃₀(926)

*みやこ新報

1947(昭和22)⁷/₁₁(264)→⁷/₁₃(265), ⁹/₂₁(297), ¹⁰/₁₁(305), 1948(昭和23)¹/₂₅(338),
²/₇(340), ³/₁₀(348)→³/₁₆(350), ³/₂₆(352)→⁷/₂₅(388), ⁸/₁(390)→⁸/₁₃(394), ⁸/₂₂(397)
 →⁸/₂₅(398), ⁹/₁(400)→⁹/₄(401), ⁹/₁₀(403)→¹⁰/₂₅(¹/₂外)→¹⁰/₂₅(433), 1949(昭和24)
¹/₇(535)→⁴/₁₉(566), ⁴/₂₅(568)→⁸/₁₈(599), ⁸/₂₂(601)→⁹/₁(604), ⁹/₇(606)→¹⁰/₅(615),
¹⁰/₁₆(617), ¹⁰/₁₉(619)→¹¹/₁₆(628), ¹¹/₂₅(630)→¹¹/₂₈(632), ¹²/₅(634)→1950(昭和25)
²/₄(648), ⁴/₁₉(661)→⁴/₂₈(664), ⁵/₄(666)→⁶/₁(674), ⁶/₇(676)→⁶/₂₂(680)

宮古タイムス

1948(昭和23)²/₁₀(202), 不明(208)→⁷/₁₈(250), ⁷/₂₉(254)→⁸/₂₃(262), ⁸/₂₉(264) →
⁹/₉(267), ⁹/₁₇(269)→¹¹/₂(282), ¹¹/₅(284), ¹¹/₁₁(286)→¹¹/₂₀(289), ¹¹/₂₆(291) →
¹¹/₃₀(292), ¹²/₈(295)→1949(昭和24)¹/₉(302), ¹/₁₈(304)→⁶/₂₆(352), ⁷/₅(355)→⁸/₂₆
(371), ⁹/₂(373)→1950(昭和25)¹/₈(411), ¹/₁₄(413)→²/₁₄(423), ²/₂₄(425)→⁵/₃(446),
⁵/₁₁(448)→⁷/₂(463), ⁷/_(不明), ⁷/₁₇(468)→⁷/₂₀(469), ⁷/₂₆(471)→⁸/₁₇(478), ⁸/₂₉(480)

→⁹/₁₄(484), ⁹/₂₀(486)→⁹/₂₃(487), ⁹/₂₉(489)→¹⁰/₅(491), ¹⁰/₁₄(494)→¹⁰/₂₀(495)

経済時報

1950(昭和125)⁴/₁₆(937), ⁶/₁₇(952), ⁹/₁(971), ⁹/₂₈(978), ¹⁰/₂₀(983)

宮古公論

1947(昭和122)¹⁰/₁₁(53), ¹¹/₁₆(60), 1948(昭和123)²/₁₀(79), ³/₃(84), ⁷/₆(96), ⁸/₁₃(110),
¹²/₁₃(133), 1949(昭和124)¹/₁₈(139), ¹/₂₈(141), ²/₈(143)→⁴/₁₈(156), ⁵/₂(159)→
¹¹/₁₃(195), ¹¹/₂₄(197)→¹²/₄(199), ¹²/₁₈(201)→¹²/₂₅(203)

時事新報 (1950 <昭和125> 6月・改題)

1950(昭和125)⁶/₇(228)→⁶/₁₂(229), ⁶/₁₈(231)→⁶/₂₁(232), ⁶/₃₀(234)→⁷/₁₅(238), ⁷/₂₅
(242)→⁸/₂₅(250), ⁸/₃₀(256), ⁹/₇(258)→⁹/₁₅(260), ⁹/₂₁(262), ¹⁰/₁₂(267)→¹⁰/₁₅(268),
¹⁰/₂₁(270)→¹⁰/₃₀(271), ¹¹/₇(273)→¹¹/₂₁(276), ¹¹/₂₅(278)→¹²/₂₁(285)

宮古時事新報 (1951 <昭和126> 5月・改題)

公報新宮古

1948(昭和123)⁴/₂₂(1)→⁷/₂₂(13), ⁸/₁₂(16), ⁹/₉(20)→⁹/₁₆(21), ¹²/₁₆(32), ¹²/₁₈(¹/₂外),
1949(昭和124)¹/₂₇(37)→³/₁₀(43), ³/₂₄(45)→⁴/₂₂(48), ⁵/₅(50), ⁵/₁₉(52)→⁷/₁₄(58),
⁹/₂₄(64), 不明(66), ¹⁰/₂₀(68), ¹¹/₆(70)

* 宮古婦人新聞

1949(昭和124)⁸/₁₅(3)→1950(昭和125)¹/₁(24), ¹/₆(26)→¹/₂₆(30), ²/₁(32)→⁴/₂₇(46),
⁵/₉(48)→⁶/₃(53), ⁷/₄(58), ⁷/₁₁(60)→⁸/₁₀(68), ⁸/₁₅(70)→¹⁰/₁₅(80), ¹⁰/₂₇(82),
¹¹/₁₃(84)→¹¹/₁₈(85), ¹¹/₃₀(89)→¹²/₁₁(91)

宮古朝日新聞

1950(昭和125)⁸/₂₁(1), ⁹/₂(3), ¹⁰/₁₂(7), ¹⁰/₂₂(9)

宮古新報

1970(昭和145)⁴/₁₂(492), ¹⁰/₁₈(649)

Ⅲ. 八重山

* 海南時報

1948(昭和123)²/₁₁(1445), 1949(昭和124)¹/₁(1451)→⁴/₂(1480), ⁴/₁₄(1484)→⁵/₂(1490),
⁵/₁₁(1493)→⁵/₂₃(1497), ⁶/₁₁(1503), ⁶/₂₃(1507), 1950(昭和125)¹/₁(不明), ¹/₅(1569)
→⁴/₂₉(1606)

旬報

* 八重山タイムス (1947 <昭和122> 月日不明・改題)

1949(昭和124)¹/₁(204)→³/₁₉(228), ³/₂₅(230)→⁴/₄(233), ⁴/₁₃(236)→⁵/₁(242), ⁵/₁₃(246)
→⁵/₂₂(249), ⁶/₄(253), ⁶/₁₀(255), ⁶/₂₅(260), ¹¹/₁(301)→¹²/_{不明}(¹/₂外)→1950(昭和125)
¹/₁₆(325), ¹/₂₂(327)→³/₁₀(341)・* 南琉タイムスへ改題→⁵/₇(357), ⁵/_{不明}(359)→⁷/₂₁
(385), ⁸/₁(393)→⁸/₃₀(406), ⁹/₂₂(¹/₂外 9報), ⁹/₂₃(¹/₂外), ⁹/₂₉(415)→¹⁰/₁₀(421),
1951(昭和126)¹/₁(487)→¹/₃₁(508)

* 自由民報

1949(昭和124)¹¹/₃(146)→1950(昭和125)⁵/₉(206), ⁵/₁₅(208)→⁷/₂₁(230), ⁸/₁(233)→

$8/31(256)$, $9/21(\text{号外})$, $9/21(262) \rightarrow 9/23(\text{号外}) \rightarrow 10/10(277)$

* 南西新報

1950(昭和25) $2/18(269) \rightarrow 3/6(274)$

八重山朝日新聞

1962(昭和37) $12/25(127)$

IV. 奄美

大島新報

↓
大島時事新報 (改題年月日不明)

* 大嶋新聞

↓
1939(昭和14) $3/16(2454)$

大島日報 (1939 <昭和14> 7月・改題)

1939(昭和14) $10/27(88)$

* 奄美タイムス

↓
1950(昭和25) $6/25(637) \rightarrow 7/11(644)$, $7/15(646) \rightarrow 7/18(647)$, $7/22(649) \rightarrow 7/29(652)$, $8/5(655)$, $8/17(660) \rightarrow 8/22(662)$, $9/7(667)$, $9/19(672) \rightarrow 9/29(676)$, $10/3(678)$

奄美新報 (1955 <昭和30> 5月・改題)

南日本新聞 (大島版)

* 南海日日新聞 (1946 <昭和21> 11月・改題)

1950(昭和25) $1/1(608) \rightarrow 1/28(619)$, $2/4(622) \rightarrow 2/9(624)$, $2/14(626)$, $2/21(628) \rightarrow 3/9(635)$, $3/14(637) \rightarrow 3/30(644)$, $4/4(646) \rightarrow 4/25(654)$, $4/29(656) \rightarrow 5/4(658)$, $6/25(680) \rightarrow 6/27(681)$, $7/1(683) \rightarrow 7/27(694)$, $8/1(696)$, $8/5(698)$, $8/17(703) \rightarrow 8/22(705)$, $9/7(711)$, $9/19(716) \rightarrow 9/23(718)$, $9/28(720) \rightarrow 10/3(722)$, 1960(昭和35) $9/8(3726)$

* 奄美時報

1949(昭和24) $10/18(110) \rightarrow 11/30(115)$, $12/10(117)$, 1950(昭和25) $1/1(119) \rightarrow 2/6(123)$, $2/28(125) \rightarrow 5/6(131)$, $6/30(135)$

大島新聞

1960(昭和35) $9/5(387)$

与論新報

1962(昭和37) $5/1(47)$, 1963(昭和38) $1/1(55) \rightarrow 4/1(58)$

V. 日本本土

沖繩と小笠原

1957(昭和32) $1/5(1) \rightarrow 1962(昭和37)1/5(181)$ ・南と北へ改題→1964(昭和39) $12/25(288)$, 1965(昭和40) $1/15(290) \rightarrow 3/15(296)$, $4/25(300) \rightarrow 5/5(301)$, $6/5(304) \rightarrow 6/15(305)$, $7/5(307) \rightarrow 7/15(308)$, $8/5(310) \rightarrow 11/15(320)$, $12/5(322) \rightarrow 12/25(324)$, 1966(昭和41) $1/15(326) \rightarrow 3/5(331)$, $4/15(335) \rightarrow 4/25(336)$, $5/25(339) \rightarrow 6/5(340)$, $8/25(342) \rightarrow 7/15(344)$, $8/15(347) \rightarrow 9/5(349)$, $10/25(354) \rightarrow 11/15(356)$, 1967(昭和42) $4/15(371) \rightarrow 6/15(377)$, $7/25(381)$, $8/15(383)$, $9/5(385) \rightarrow 9/15(386)$, $10/5(388) \rightarrow 12/5(394)$, $12/25(396)$, 1968(昭和43) $1/15(398) \rightarrow 2/25(402)$, $3/15(404) \rightarrow 5/15(410)$, $6/25(414) \rightarrow 7/15(416)$, $8/15(419)$,

$10/25(426) \rightarrow 12/15(431)$, 1969(昭和44) $1/5(433) \rightarrow 1/25(434)$, $2/15(437) \rightarrow 6/5(448)$,
 $6/25(450) \rightarrow 7/15(452)$, $8/5(454) \rightarrow 10/5(460)$ ・旬刊沖繩へ改題 $\rightarrow 10/25(462)$, $11/5(464)$
 $\rightarrow 12/5(466)$, 1970(昭和45) $1/5(469) \rightarrow 3/15(476)$, $4/5(478) \rightarrow 5/15(482)$, $6/5(484) \rightarrow 6/15$
(485), $7/5(487) \rightarrow 7/25(489)$, $8/15(491)$, 1971(昭和46) $1/5(505)$, $2/15(509) \rightarrow 3/25(512)$,
 $4/5(514) \rightarrow 4/15(515)$, $5/5(517)$, $5/25(519) \rightarrow 8/25(528)$, $9/25(531) \rightarrow 10/25(534)$, $11/15(536)$
 $\rightarrow 12/15(539)$, 1972(昭和47) $1/5(541) \rightarrow 2/5(544)$, $2/25(546) \rightarrow 3/15(548)$

月刊沖繩

1973(昭和48) $4/25(1) \rightarrow 1983(昭和58)12/10(129)$

自由沖繩

1945(昭和20) $12/6(1) \rightarrow 1946(昭和21)2/10(号外) \rightarrow 2/24(4)$, $5/5(6)$, $6/15(8) \rightarrow 1948(昭和$
23) $10/13(号外) \rightarrow 10/20(29)$

自由沖繩(九州版)

1946(昭和21) $6/15(1) \rightarrow 8/25(8)$, $9/15(10, 11)$

自由沖繩(関西版)

1947(昭和22) $4/10(2)$

沖繩タイムズ

1947(昭和22) $11/10(1) \rightarrow 1948(昭和23)3/15(3)$, $8/5(5) \rightarrow 10/5(7)$

* 沖繩新民報

1946(昭和21) $1/25(1) \rightarrow 5/5(12)$, $6/25(14) \rightarrow 1947(昭和22)8/25(44)$, $9/15(46) \rightarrow 1948(昭和$
和23) $1/5(53)$, $2/5(55) \rightarrow 12/5(82)$

育英会報

1956(昭和31) $9/20(2) \rightarrow 1957(昭和32)1/20(3)$, $9/25(5) \rightarrow 1958(昭和33)1/25(6)$, $10/8(9)$,
1959(昭和34) $4/1(12) \rightarrow 1960(昭和35)6/6(18)$, $11/14(20) \rightarrow 1961(昭和36)6/9(23)$, 1962
(昭和37) $2/19(26)$, $6/11(28) \rightarrow 1969(昭和44)6/5(61)$, 1970(昭和45) $1/19(63) \rightarrow 4/22(64)$

<その他の所蔵新聞>

沖繩労働者新聞	琉球土地住宅新聞
沖繩の婦人	電水協ニュース
沖教職教育新聞	おきなわ観光新聞
週刊沖繩建設新聞	醸界飲料新聞
サンデーおきなわ	おきなわPTA新聞
* 久米島新聞	週刊沖繩経済新聞
週刊ポストおきなわ	沖繩産業経済新聞
結核予防会新聞	片内新聞(琉球政府)
週刊中部新聞	沖繩保健新聞
中部日報	宮古教育時報
沖経協ニュース	琉工連ニュース
沖繩福祉新聞	沖繩情報

農協ニュース	愛楽新聞
療友新聞	沖縄出版ニュース
中部情報	沖縄女性新聞
女性ダイヤル	* Ryukyuan Review
* Weekly Okinawa Times	先嶋新聞
先嶋朝日新聞	八重山新報
八重山民報	

〈参考文献〉

1. 烏袋全発「有名事件と新聞－昔の琉球新報を中心として－」（『琉球新報』〈1952年1月26日〉掲載）
2. 浦崎康華「沖縄新聞春秋－沖縄における新聞発達の三期」（『琉球新報』〈1952年7月25日〉掲載）
3. 仲吉良光「私の新聞記者時代」（『沖縄タイムス』〈1956年4月24日－5月26日〉掲載）
4. 「琉球新報にみる沖縄70年史」（『琉球新報』〈1963年9月15日〉掲載）
5. 「戦後沖縄マスコミ残酷物語」（『琉大タイムズ』〈第23－24, 26－28, 32号, 1962－65年〉掲載）
6. The newspapers of the Ryukyu Islands. U.S.C.A.R., 1964.
7. 辻村明・大田昌秀『沖縄の言論－新聞と放送－』（南方同胞援護会・1966年）
8. 烏清『ウルマ新報発刊の経緯－戦後沖縄文化史のために－』（パンフレット・1968年）
9. 『新聞・沖縄戦後史 沖縄タイムス社史』（沖縄タイムス社・1969年）
10. 仲吉良光『『沖縄朝日新聞』創刊当時の沖縄』（『沖縄タイムス』〈1971年9月28日－10月12日〉掲載）
11. 『琉球新報八十年史』（琉球新報社・1973年）
12. 高嶺朝光『新聞五十年』（沖縄タイムス社・1973年）
13. 大田昌秀「新聞・放送」（『沖縄県史』〈第5巻・1975年〉所収）
14. 大田昌秀「戦後沖縄の新聞－ウルマ新報・うるま新報・琉球新報－」（『那覇市史』〈資料篇第3巻3・1978年〉所収）
15. 『新聞三十年 沖縄タイムスが生きた沖縄戦後史』（沖縄タイムス社・1979年）
16. 我謝幸男「解説」（『那覇市史』〈資料篇第3巻4・1983年〉所収）
17. 『沖縄大百科事典』（〈上・中・下・別巻〉沖縄タイムス社・1983年）

（伊佐眞一・閲覧係）

アセアン五ヶ国資料目録(2)

タイ

1. The Dynastic Chronicles Bangkok Era The First Reign. The Centre for East Asian Cultural Studies 1978 223.7-FL
2. Bangkokud. Charles E. Tuttle co. 1976 223.7-Ka
3. Research Institutes and Researches of Asian Studies in Thailand. The Centre for East Asian Cultural Studies. 1964 223.7-RE
4. Politics in Thailand. Cornell Univ. Press. 1967 223.7-WI
5. A History of SIAM. AMS Press 1933 223.7-WO
6. タイ國地誌 古今書院 1931 292.37-N91
7. タイ国 創文社 1975 292.37-Ta21
8. もっと知りたいタイ 弘文堂 1983 302.23-A98
9. Asian& Pacific way of Life Series Thailand. Cultural and Social Centre for the Asian and Pacific Region 1975 302.23-KH
10. タイの近代化 日本国際問題研究所 1978 302.237-Ko57
11. タイ・ビルマ現代政治史研究 京都大学東南アジア研究センター 1968 312.237-Y58
12. タイ経済の発展構造 アジア経済研究所 1978 332.237-Ka23
13. 泰の経済 朝日新聞社 1943 332.237-Ma85
14. タイ経済発展の諸条件 アジア経済研究所 1973 332.237-Sh91
15. タイ アジア経済研究所 1976 331.232-Ta21
16. タイ製造業に対する日本と米国の投資 アジア経済研究所 1978 333.8-So38
17. タイ・ビルマの人口と経済 アジア経済研究所 1972 334.3-Mi37
18. タイの経済発展と教育計画 アジア経済研究所 1966 372.23-A42
19. タイの昔話 三弥井書店 1976 388.237-Ta21
20. タイ族 弘文堂 1971 389.237-A98
21. カレン族の社会・文化変容 創文社 1971 389.237-I27
22. サワハン アジア経済研究所 1981 612.242-Ka58
23. The Arts of Thailand. Indiana Univ. 1960 702.2-AR
24. タイ語基礎1500語 大学書林 1978 829.3-Ma91

シンガポール

1. シンガポールの創始産業 アジア経済研究所 1969 332.2399-H32
2. シンガポールを中心に同胞活躍南洋の五十年 1937 334.42-N48

マレーシア

1. マレーシアの旅 KKワールドフォトプレス 1981 292.09-Ma39

2. 南洋叢書第三巻 英領マレー篇 東亜経済調査局 1931 292.4-Ma48
3. 現代マレーシア政治研究 アジア経済研究所 1978 312.239-N14
4. マラヤ・シンガポールの経済開発 アジア経済研究所 1962 332.239-Ma85
5. マライ政治経済論 千倉書房 1943 332.239-Mu24
6. マレーシアの所得分配構造 アジア経済研究所 1975 332.239-W46
7. マレーシアの開発行政 アジア経済研究所 1973 333-H13
8. マレーシアに対する日本の直接投資 アジア経済研究所 1980 333.8243-C37
9. マラヤの華僑社会 アジア経済研究所 1973 334.5-I41
10. マレーシアの労働事情 日本労働協会 1981 366.0223-N77
11. マライシャに於ける稲米儀禮 東洋文庫 1966 389.239-U77
12. マレーの農産資源(-) 東亜研究所 1931 602.239-To12
13. マレー農村の研究 創文社 1976 611.92-Ku15
14. マライ=ポリネシア諸語 弘文堂 1975 824.9-I99

インドネシア

1. バタヴィア城日誌2 平凡社 1972 224-B27
2. バタヴィア城日誌3 平凡社 1975 224-B27
3. インドネシア現代史 世界思想社 1969 224-G77
4. オランダ東インド会社 近藤出版社 1976 224-N25
5. インドネシア民族意識の形成 東京大学出版会 1980 224-N25
6. インドネシアの独立と革命 龍溪書舎 1973 224-Su11
7. 日本軍政とインドネシア独立 鳳出版 1977 224-Ka43
8. インドネシア資料集上 日本国際問題研究所 1972 224.088-N77
9. Bali Profile. American Univ. Field Staff 1976 224.1-HA
10. 蘭印事情 羽田書店 1940 292.24-O52
11. 蘭領東印度地誌 有光社 1940 292.24-O84
12. 蘭印踏破行 有光社 1942 292.24-Sh21
13. スマトラの民族 上巻, 下巻 東亜研究所 1943.1944 292.41-L82
14. スマトラ 大東亜出版 1943 292.41-Ts91
15. ボルネオ 二宮書店 1982 292.43-Y21
16. セレベスの南東半島 南洋興業 発行年なし 292.45-E36
17. もっと知りたいインドネシア 弘文堂 1983 302.23-A98
18. インドネシアの権力構造とイデオロギー アジア経済研究所 1969 312.24-I72
19. インドネシア民族意識の形成 東京大学出版会 1980 316.824-N25
20. インドネシア 早稲田大学 1979 319.1024-W41
21. Indonesian Foreign Policy and the Dilemma of Dependence. Cornell Univ. press. 1976 319.24-WE
22. インドネシア アジア経済研究所 1978 332.24-Mu77

23. インドネシアと日本 日本経済新聞社 1958 332.24-N77
24. インドネシアに対する日本の直接投資 アジア経済研究所 1979 333.8-W72
25. インドネシアの社会構造 アジア経済研究所 1969 361.6-Ki56
26. インドネシアベトナムの神話伝説 名著普及会 1979 388-Se22
27. インドネシアの民話 牧野出版 1974 388.24-I54
28. インドネシアの民話 未来社 1958 388.24-Ma42
29. インドネシア ぎょうせい 1982 389-Se22
30. インドネシアの米 創文社 1975 612.24-Mo88
31. 基礎インドネシア語 大学書林 1981 829.4-Mo56
32. 図解インドネシア語会話 海文堂 1979 829.4-N38
33. 図解インドネシア語会話 海文堂 1975 829.4-N38
34. インドネシア語会話ハンドブック 大学書林 1978 829.4-Su18
35. インドネシア語文法入門 大学書林 1977 829.4-Su18
36. インドネシア語会話練習帖 大学書林 1976 829.4-Su18
37. インドネシア語の入門 白水社 1979 829.4-U93

フィリピン

1. フィリピン史物語 井村文化事業社 1977 224.8-A19
2. フィリピン民衆の歴史 I. II 井村文化事業社 1978 224.8-C86
3. History of the Philippine Islands. Kraus Reprint Co. 1970 224.8-Mo
4. 比律賓紀行 河出書房 1941 292.248-N33
5. 南洋叢書第5巻 比律賓篇 東亜経済調査局 1939 292.4-Ma48
6. もっと知りたいフィリピン 弘文堂 1983 302.23-A98
7. Social Foundations of Community Development. R.M.Garcia Publishing House
1964 302.248-ES
8. 現代フィリピンの政治構造 アジア経済研究所 1977 312.248-G34
9. フィリピン アジア経済研究所 1969 332.248-Mo56
10. 国際経済13巻8号-フィリピン総特集 国際経済社 1976 333.6-Ko51
11. フィリピンと日本 日本経済新聞社 1958 332.248-N77
12. フィリピンの金融事情 アジア経済研究所 1971 338.248-Ta46
13. 比律賓の土俗 丸善 1942 382.248-Mi91
14. フィリピンの社会人類学 敬文堂 1980 389.248-Ki24
15. ダバオ開拓記 古川拓殖(株) 1956 602.248-F93
16. フィリピンの農業 アジア経済研究所 1970 612.248-Mi73

新入生のための図書館案内

入館→	求める図書が図書館にあるかどうか調べたい場合	→	目録室へ (2階)	→退館
	図書を借りたい場合	→	カウンターへ(2階)	
	図書を返したい場合	→	カウンターの返却台へ(2階)	
	調べものをしたいが、どうしても良いかよく解らない場合	→	参考調査係へ(2階)	
	参考図書を利用したい場合 (事典, 年鑑, 便覧等)	→	参考及び指定図書室へ (2階)	
	指定図書を利用したい場合	→	〃	
	図書館に是非置いて欲しい図書がある場合	→	図書購入希望票に記入(2階)	
	図書館の本をコピーしたい場合	→	複写室へ (3階)	
	沖縄関係資料を利用したい場合	→ (借覧証有り)	カウンターへ(2階)	
	他大学 (B. L. L. D. 等) に文献複写を依頼したい場合	→ (依頼書有り)	参考調査係 (2階) 又は複写係(3階)へ	
	マイクロフィルムを利用したい場合	→ (借覧証有り)	参考調査係へ(2階)	
	視聴覚室・演習室・語学室を利用したい場合	→ (利用許可書有り)	参考調査係へ(2階)	
	新聞を閲覧したい場合	→	ブラウジングコーナー(3階)又はカウンター(2階)へ	
	雑誌を閲覧したい場合	→	雑誌室へ (3階)	
	ユネスコ及び OECD 資料を利用したい場合	→	雑誌室へ (3階)	
	紀要類を利用したい場合	→	雑誌室へ (3階)	
	アメリカ研究図書を利用したい場合	→	開架閲覧室へ(3階)	

快適に利用するよう心がけましょう

貸出手続きしないで図書を持ち出すと出口でブザーがなります。

和漢書 → 総記・哲学・宗教・歴史・地誌・紀行・社会科学・数学
物理・化学・天文学・宇宙科学・地球科学・地学・地質学
生物科学

2階開架閲覧室と2階書庫。

	植物学・動物学・医学・工学	}	3階開架閲覧室と2階書庫。
	産業・芸術・語学・文学		
洋書	→ 総記・哲学・宗教・歴史・社	}	3階開架閲覧室と1階電動書架。
	会科学・自然科学・産業・芸術・語学・文学		
雑誌	→		3階雑誌室と1階電動書架。

開館と貸出冊数・期間

1, 開館時間

		休暇中		
月～金	8:30～21:00	月～金	8:30～17:00	
土	8:30～16:30	土	8:30～12:30	

但し、本の貸出は開館後30分から閉館30分前までです。

日曜、祭日閉館 試験期は日曜(13:00～18:00)開館

2, 貸出冊数と期間

学部学生	: 12冊まで10日間
院 生	: 18冊まで10日間

投書箱より

今回は昭和58年11月から今年1月までの投書についてお答えします。

1. 書架整頓について

春夏冬の長期休暇中に図書館職員全員で、書架整頓を行なっています。平常は閲覧係職員が空き時間を利用して書架整頓をするように努力しています。学生の皆様方のご協力をお願い致します。

2. 教官研究用図書について

教官研究用図書については使用済となったものは極力図書館へ返却していただくよう努力しています。共用図書については教官も学生も10日間で返却してもらっています。

3. 貸出禁止図書及び稀用図書について

学生に比較的好く利用されると思われる図書は2階および3階の閲覧室に配置してあります。また、比較的あまり利用されないと思われる図書は北側の書庫に所蔵していますが、学生は17時までは自由に出入りできるようになっていますので、ご利用ください。

4. 机と椅子がひくすぎる。

木製椅子と折たたみ椅子を交換してみました。2階13脚、3階9脚です。そのままでもよいという人も居りましたので、従来どおりのままのものもあります。

図書館事情

〔第152回図書館運営委員会〕

日時：昭和58年11月21日（月）10：30～11：30

場所：図書館会議室

議題

1. 「教官閲覧個室利用申し合せ」の改正について
2. 図書館の環境整備について

報告事項

1. 沖縄文献保存事業費の援助接渉経過報告
2. 古文書の展示会終了について
3. アセアン五ヶ国関係資料コーナーの設置について
4. 工学部資料室の開設（11月10日）について
5. 医学部分館設置について（11月10日部局長会で決定）
6. 閲覧時間の延長について

〔第153回図書館運営委員会〕

日時：昭和59年1月23日（月）10：30～11：45

場所：図書館会議室

議題

1. 講演会について

報告事項

1. 指定図書について
2. 夜間開館延長について
3. 医学部分館建物新営費について
4. 医学部分館移転費について
5. ジョージ・H・カー氏の寄贈資料について
6. 昭和59年度前学期定例日のための時間割調整について

〔第154回図書館運営委員会〕

日時：昭和59年2月20日（月）10：～30～12：00

場所：図書館会議室

議題

1. 昭和59年度図書館主催映画会について

報告事項

1. 夜間開館延長問題について
2. 文学及び演劇作品等の原稿、寄贈について
3. 米国在沖縄関係文献の所蔵の有無及び情報収集について
4. 和書の著者名、書名冊子目録について
5. 端末による情報検索について

6. 植栽について

<出張>

- 。58年12月1日(木) 整理係松原敏夫, 第一回文献情報センター・シンポジウム出席
東京 3日まで
- 。59年2月2日(木) 事務長平良恵仁, 医学部分館設置申請, 文部省 4日まで

<見学者>

- 昭和58年11月18日(金) 平安座中学校(25名)
- 昭和58年12月3日(土) インドネシア研修生(国際協力事業団)(5名)
- 昭和59年1月13日(金) 県立教育センター垣花氏外4名

<来館者>

- 昭和58年11月26日(土) 九州大学附属図書館長高野氏
- 昭和58年12月5日(月) ジョージ・H・カー博士

<講演会> 第10回

- 昭和58年11月24日(金) 17:30~
- 講演者:石川 友紀(地誌学) 法文学部助教授
- 演 題:移民と沖縄—南米移民実態調査を例として

<講演会> 第11回

- 昭和58年12月15日(木) 17:30~
- 講演者:渡久山 章(物理化学) 理学部助教授
- 演 題:沖縄の環境を考える

<講演会> 第12回

- 昭和59年1月24日(火) 17:30~
- 講演者:玉城政光(教育学) 教育学部教授
- 演 題:教育と行動工学

<講演会> 第13回

- 昭和59年2月15日(水) 17:30~
- 講演者:田里友哲(地誌学) 法文学部教授
- 演 題:屋取集落の形成とその性格

<映画会> 第8回

- 昭和58年11月18日(金), 22日(土)
- 「サイコ」アルフレッド・ヒッチコク監督 見学者435名

<映画会> 第9回

- 昭和59年1月27日(金), 28日(土)
- 「豚と軍艦」今村昌平監督 見学者77名

<その他>

- 昭和58年12月22日(木) 沖縄関係医学 保健資料の寄贈及目録の贈呈式
- 昭和59年1月18日(水) 琉球弧の新聞展31日まで

〔本学教官著書寄贈コーナー〕

今回は、昭和58年12月6日より昭和59年3月9日まで御寄贈頂きました分を掲載致します。敬称略

- | | |
|--------------|--|
| 鈴木 雅夫(家庭科教育) | 「現代住宅の地方性」 鈴木雅夫他執筆 勁草書房
1983 |
| 伊志嶺恵徹(民事訴訟法) | 「公法の研究」 沖縄時事出版 1983 |
| 翁長 謙良(農地工学) | 「Land and water Management Technology in
Rainfed Areas」 FAO 1983 |
| 崎原 盛造(保健管理学) | 「中部地区老人福祉の展望」沖縄市, 浦添市, 宜野湾市,
具志川市, 石川市, 及び中頭郡老人福祉センター運
営協議会 1983 |
| 山本 聡(堆積学) | 「News of Osaka Micropaleontologists」山本聡他執
筆 大阪微化石研究会 1983 |

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第17巻 第1号 [通巻第62号]

昭和59年3月26日 発行

発行人 平良恵仁 沖縄県中城村字南上原858

電話(09889)5-2221内線(2143) 編集 参考調査係